# ハイデガーの真理概念

トゥーゲントハットによる批判を中心に

佐々木 護

はじめに

返されていることはよく知られている。 schlossenheit) を表す存在論的根本概念として捉え αλήθεια の独自の解釈を通じて「非隠蔽性 露性 (Entdecktheit) や現存在の開示性 verborgenheit)」として特徴づけられ、 ハイデガーの真理概念が、ギリシア人における 存在者の暴 (Un-(Er-

不問に付されてきたように思われる。『フッサール とハイデガーにおける真理概念』 れることになるのかについてはこれまでほとんど る必要があったのか、 に見えるほどに真理概念をわざわざ「拡 ントハット (Ernst Tugendhat) は、こうした状況に だが、なぜ彼が通常の意味を大きく逸脱するか またそれによって何が得ら の著者トゥーゲ 張 させ

> ない。 え、 議論 性を際だたせることを試みたい。 射される形でハイデガーの真理概念の拡張の 概念を批判しているのかを検討し、そこから逆照 ける真理の理念」での議論をもとに、トゥー あってハイ ットがいかなる点においてハイデガーの真理 を行 彼の論究にもいささか問題点がないわけでは 本論 った数少ない者の一人である①。とは では、 デガーの真理概念につい 彼の講演論文「ハイデガ て踏 み込 1 ゲン h

のアプローチは次のようなものである。 ゥーゲントハ トゥーゲントハットによる批判 ットによるハ イデ ガー 0 真

確実性 様相 自身 を「 理 るが、 ŧ のは、 が 根 持 7 ガ 7 お 理 評 発 1 取 根 0 源 0 開示性」や「 の真 最も 解 0 的 7 b は 0 b た を 価 何 0 源 5 こ 出 P 問 呈 は ŧ に され 存 か 的 からすると ようとする点 る。 明証 は 与えられ それ 在と い すこと 理論をすでに前 のような理 根源的 な な 題 L うる。 てい P \$ を と問う 何 t 11 意 を深化 遂 確実 を意 根 時 0 性という視点を放棄 識 る。 間 行 が な真 ハイ 0 源 に立立 非 性 す 0 味 で ところ 点 ているも 的 隠 る デ P 発展 で 解 理 第 きるとい 7 ち、 蔽 四 た n ガ 明 お 与 あ 7 は 現 0 面 性 象」 えら 8 証 が さ る(2) 真 は 提 的 11 超 74 11 1 」と規定するハ 不可 L 性 せ 理 は 7 越 節 る わ の」とし ウ に であ n ح うハ てお ようとす を 現 11 11 論 n ĺ 0 わ 他 イデ イデ 存 哲学 遡 解 11 7 か ゲ a り、 り、 う L では n ウ 1 行 ント ならな 在 い ても の自 て取 ガ 視 る 的 0 ガ 0 デ 堂々巡 点 t ゲ た ガ L 開 る 系 お 態 な 1 1 11 なお イデ かも真 然的 に り出 け そ 1 度に 11 が は 口 譜 0 11 示 ツ と述 性 基 る 1 0 0 か 積 1 な ガー すも 最も 1/ りの か 言 問 づ 極 性 属 11 は、 理 場 0 真 ~ 的 本 表 題 11

> ある。 際、 件 7 な 5 露 ぜ 真 から出発したという事実は、 条件であることに固 (b) にお を彼 ければならな ないとい させること (Entdecken)」とし な 理 ット 5 ることは 拡張させるため 言表真理から出 (Aussagewahrheit) L が はこ 結 か ハイデガー 11 L う小節 局 7 認 な は 0 受け いとい がら、 要 め 真理概念を暴 求 るに 自身 発し 容れ が 執 0 a も いう要求 真 言表 前 L 0) 理概 かかか 哨 7 # たこと での主 分析 戦 お 真 真 11 念を満 理 イデ むし わ を 理 を h 露作用 概 に 0 5 11 こ な 7 張 ろ真 ガー ず イデ そが 理 言 念 注 証 L が たす P 解 表 7 を 目 拠 が言 ガ 開 され 1 真 11 真 す 理 な 続 ~ ウ 1 る 理 る(3) 理 0 示 0 だ き 1 概 か 性 < は 最 表 が ね 5 低 真 最 斥 念 全 1/1 け で 低 理

第 は ガ あ 次 1 1 ウー 0 のテー wie es an ihm selbst ist) \ 通 お 存在者それ自身に 存在者が、 ゲントハ け b る ゼ:言表 言 表 る ット 真 存在しつつ言表 が真 理 が 0 11 即 で テ 節 あ 1 L る ゼ 7 a) に 挙 は そ 0 示す は に n お 見 から 0 出 る あ そ あ る。 すハ る n 挙 場 通 が 合 存 1 b 示 デ

する。

ある。 に自同性(Selbigkeit)において存在する」場合でに自同性(Selbigkeit)において存在する」場合でれ(aufgezeigt)、暴露されている(entdeckt)通り

解されねばならない」(4)。 解されねばならない」(5)。 解二のテーゼ:「言表が真である(言表の真理)と 第三のテーゼ:「言表が真である(言表の真理)と は、暴露させつつあること(Entdeckendsein)と理 は、暴露させつつあること(Entdeckendsein)と理 は、暴露させつつあること(Entdeckendsein)と理

ゲントハットは見るの »So-Wie«」という形で言表と事象との この「の通りに »So-Wie«」という合致定式を保持 からである。二つのテーゼはいずれも「の通りに テーゼに見られる「存在者それ自身に している限りにおいて、ハイデガーの真理規定は がある通りに」の縮約形態と見なすことができる 同じことを述べている。第二のテー 現象学的真理理 (Ubereinstimmung)」性格を保持している。 存在者それ自身に即して」という表現 このうち、第一のテーゼと第二 が 『論理学研 「論」の 再受容にすぎな 究 第六 研 0 ・ゼに テー 究 VI で 即してそれ 展開 は とトゥ 見 ゼは結 「合致 られ 第 L た

> 向性を てハ りに」という定式を欠いてい 力動的に開示性の一様式として、とりわけ「挙示」 歩によって初めて、 な働きと密接 である。 離脱した独自 第三のテー 題 イデガー は第三のテー \_ 開示性」 真理概念は ぜこそ、 な関係を獲得する。この決定的な の真理概念に達する「決定的な は何の断りも付けていな 概念で乗り越え、 ハイデガーはフッサー ハイデガー ぜである。このテーゼは 「暴露させる」という力動的 る。 がフッサール この欠落に 言表をいわば いが、この ルの志 から

取 ントハットはハイデガーの議論の危うさを見 のだということである。まさにこの点にトゥ イデガー る言表であれ 表立っては全く区別していない点に 義性が見られ、しかもこの両義性をハイデ っている。それは、「暴露」という語の使用 即してそれがある通りに」という資格は不要な しかし、それと同時にはっきりしてくるのは といわれる。 見られるように、「あらゆる言 の真理概念にとっては「存在者それ自身 真なる言表であれ イデガーは 一方では、 「表は いっそう極 露させ ガ 1 に 7

て理解することが可能になる。

露的 をし とを示 では 述べ それ 者は も この二重 一般」という広義の意味と、「偽なる言表は あ かは不問に か る。 であ でも な な あ わ ること る意 らず L 11 U てい b 0 0 このことは、「暴露」とい なお塞ぎ立てられている (verstellt)」とも 」という場合の狭義の意味をも有するこ 暴露 偽なる言表はい 味ですでに暴露されているとは る。 付されたままであ いかな 暴 概念 方では、 露 に 的) に ŧ る意味におい か である」と見なし ついて何ら立 言表が偽なる場合、「 かわらず かなる意味に る。 て遮蔽的 う語が ち入った言及 11 1 てい お デ 暴露 ガー で VI 11 て暴 るに 存 あ 的 る

暴露 und Ver-borgenheit) せるということが、 念) に回収されてしまうことになる。「も (すなわち狭義の暴露概念)を規定する可能性 隠され、すべてが「現れと隠れ すことに尽きるのだとしたら、 それだけでは であるのか つま 概念を広義 めり、 何が偽なる言表 な の暴露概念で隠蔽することに といった真や偽の「特殊的意味 11 存在者を隠蔽性 暴露概念の無区 0 動 的 であ 構 造 り、 真 (Entborgenheit から明 広 理と非真理と 別 義 何 は が真 し暴 0 暴 る 狭 露概 が覆 3 露 繋 義 る 3 0

> して、 て力 こそが、 7 が なのである(の。 のでは 機を欠い 示 11 小す存在 う言 いるに 動的 たとえ ないか。「それ自身であること (Selbstsein)」 ハイデガー 11 露現の「批判的法廷 (die kritische Instanz)」 ては真偽を語る意味がなくなっ 者 i に隠蔽性 方をする理由 っても、 に即し 11 イデガ トゥーゲントハットはこのように してそれ それが真である限 0 から非隠 1 真理概念 は 0 があるる 言うように なくな 蔽性 の無批 通 0 へと方向 りに てしまう」。 り、「 判 举 性 \_ 示 てし づけ ح お 0 0 能 VI られ 危 まう う n 惧 契 を

拡張 概念 かにハ 的 では 概 0 0 内 この危惧は、 だろうか。 で 配 喪失」であり、「不当」でさえある。 世界的存在者に関するあらゆる言表真理がわれ ある。 に 慮にまで拡 に を真 あるからといって真 イデガー つい 向かう小節 理 ては L 概 念と同 暴露、 か 言表の領域を超え、 張 何も語 が開示性を志向 L (b) にも引き 開示性、 そも たことは らない 視 そも する 理 の一様態と言 とい ことは 重 非隠 配 慮は 性 要で決定的 を超えた現 継 真理 う意味 蔽 性とい が というの それ n 概 特 つて 念自 る 殊 で「一つ が 的 な 0 た諸 よ 暴 存 体 真 た 理 0

をあらわにす

デガー 開 が非隠蔽 とに行き着く」からである。 ことは真 した地平の ができるということに行き着 の地平に ことが決定的 するなら そのもの うことができる を批 と引き替えに遮蔽する で真理と呼んでい 示するとい て問題となる かか をそれ と引き寄せるどころ どのように 判 n の態度は、「一面では、 (理の には 性 的 際してなお真理という言 てしまう。 上を意味 真理を問う必要は だけで 吟味 う事 な問 真理を問うことになるからというこ もはや適用され得ない 真 のは 0 理 しようとすることは 実 するのだとしたら、 11 か 7 問 るという事実は 0 つの となる」。 2 もっぱら世界了 題 1 0 全 3 あ か、 デ 真理 る 地 体 であり、 であ ガー VI 平 が 結局 今やこ 開 な き、 は であると答える 0 われわれは了解とそ にもか る。 示性 V) が 真 真 開 他 理 そうし のところ、 い方をすること 理 解が のか に 0 を 示 なぜならこの 面では、 かわ 0 真 開 性 問 真理に 問 つい 地 をそ た世 おの 理 示 題 5 平 11 性 0 ず、 とい は 7 を真 界 関連 埒 n n t 集 0 真 11 地 1 開 3

n

このような概観を経た上で、

1

ウ

わ

n

0

了

0

歴

史的

地

平に

対

L

て相

对

的

0

あ

ると

彼

それ かった」の。 思惟されたために揺動 (Tiefendimension) 性を引き出そうとする危険もあった。 たに仕上げる可能 るという点には、「批判的 うとする。 もしくは遊 な所与を求めつつも、 (Schwebe) た遊動空間は った不動 ットは 運 根源 反省 VI ゆえに、 であ う ハイデガー 当初 統 化 の契機を放棄し 不 する歴史的地平に据えた点は評価 0 のも 制 動 動 0 的 可能性を持っては ハイデガーの真理概念は そうした可能性 空間 問 理 の最終的 のにでは 念や なし 性 が超越論哲学同様、 いにどのような形で答えたの (Spielraum) といった揺動 それが投企であれ非隠蔽性 があった。「だが、 批 に直 のうちでは獲得され その根源を実体や主体 判 意識 てしまっ 根拠という支えを放 真 なく、 的 接的 理 基 を放 0 礎 い 0 理念を根 なものとしての 現存在 たのだが 棄し新たな た点に 深 け 3 最も根 実際 0 0) 失敗 超越論 源化 0 まさし 開示 得 直 しよ 開 L 棄 か 元 な 2 接 新 व ع 的 実 哲 0 か

るというわけである。

# 問題提起 一 トゥーゲントハットの議論から汲み取られる

点があると言わざるを得ない。 えている。 ほとんど評価 真理概念全体を貫く「無批判性」の発端とな なく保持し続けるのでなければ、 者それ自身に即してそれ の通りに»So-Wie«」定式の欠落が、ハイデガー う点を強 ゥーゲントハットは、言表真理における「存 しかし、 調 しえないものとなるであろう、 し、 もしこの定式を欠落させること 彼の所論には次のような問題 がある通 彼の真理概念は りに」とい と考 ると 0 在

た亀裂は び第二のテーゼと第三のテーゼとの に」という定式 トハットの 文脈 に 無視することによってしか成り立ち得ない。 「存在者それ自身に即してそれがあ の中 抽出された三つのテーゼ 所 ~ 作 語り出され が の欠落を取 かか な り暴 たも り出 力 的 ので であ す際 がい あることを意 間に設けられ る。 のトゥー ずれ 第一 る通り およ ゲン # 同

通りに»So-Wie«」の定式は欠けており、それが「暴第三のテーゼには「存在者に即して」という「のを意味するものであることを示しているのである。表が実際に「存在者を暴露しているという事実\_

強調ゆえであることはたしかであると

内容的にも文脈的にも三つのテー

ゼに異

同

れる。 る、 て、言表の確証としての「言表の真である」は、言 れるのであり、第二、三のテーゼは、これを受け わる当の存在者を暴露しているという事実」であ という事実」であり、「言表する存在が、 において思念されていたものが当の存在者である なものと物理的なものの合致ではなく、「先の言・ されているのは、 この問 であるのか、また言表を確証する意味は何 か かっている絵は斜めだ」という真なる言表を下す。 けの中で表れ 三つのテー の言 っている壁の絵を知覚することによって証 と答える。 この例において、証示されているものは、 いに対しハイデガーは、 は、 ・ゼは、 る。 言表した人が振り返って斜め 第一のテーゼは、ここから抽出 誰かが壁に背を向けて 認識作用と対象との合致、 次のような事例 知覚において証 即 L それ た問 壁 な が関 示さ 一に掛 心 に 11 的 何

て抹 てて強 だろうか る 消 という定式 とは され は 思 ても され え な な は VI な 11 0 11 ŧ 第三のテーゼにおい 7 0 ということに あ の、 る。 しかしだからとい とす る なる 0 てとりた -では 0 通 つ h

が に 主張に固執し続け あ 11 0 n い における る 立 ては 「言表」 真理概念 真理であると見なさなけ が 真理概 ての説得的 場 では に 何 トゥーゲントハ 「無批 曲 t な 答え を超え出 来す であ 念であるため 11 るとい な る 判性 だろうか。 7 る。 理 ŧ VI 由 0 てはならな な 」への危 を明 うト で だが、 110 ット あ 0 れば 5 る ウ ハイデガー 最 は 以上、 1 惧 か なぜ言表真理 低 言 が、 なら 条件 に い ゲントハ 0) L 表 かとい 7 言表 なぜ真理 な で 真 お あ 0 VI 理」こそ く必 ット 0 真 真 る う点に 理 理 か を ح ·自身 要が 概念 概 に 第 11 そ 念 う 7 0

間

引い ガ ると言 開 F ても か 0 0 真 え 問 しそうは 理 な る 題 概 お か 0 念に もし 1 あ ウ る限 言 突きつける本質的 1 n 0 7 り未 ゲ も、 ン 11 0 だ表 1 以 11 うし 上 ツ 面 1 的 0 た問 問 0 な # な 題 所 問 論 題 点 0 点を 題 に が が 提 とどま 11 論 差し 起は 1 述 デ 展

> 次 0)

を明 を提起する。 のように論じ 暴露的、「偽」を遮蔽的とする狭義の特徴づけとの 意義を「挙示」とする広義の特徴づけと、 である)」と述べる。このことは、 に生じる暴 念 一方で「言表は 他方で「偽なる言表は暴露的でな 示し に は二 1 てい ウ 義 Í 切ろうとしてい 露概念の交錯をハイデガー自身は な 性 ゲント い が す 点 潜 を指 ん べて暴露 11 で ツ 摘 11 1 してい るにも は たの 的 であ 11 言表 る。 か か 1 か る デ とい の第一 い 11 わ ガ とい 「真」 (隠蔽 イデ 5 1 う ず 0 次 ガ 11 そ 暴 的 題 的

は

t 偽 0 0 が、「隠蔽から露 するの ること、 X 0) 暴 0 別をとり (二)トゥー 露 から 露概念)のうちへと解消され 特殊的意 概 不 念 問に付され 11 b VI (「偽なる言表は暴露的でない」) う真 かえ 味 け ゲント 問 現 を規定 偽 n 題 ていくという点に 0 ば に の移行」という運動性 11 判別 す ツ する 1 何 る 基 背 をもって真 が二 準 (狭 可 景 能 に つの 性 は 義 暴 判 0 0 あ 隠 そ 露 別 または る。 基準 蔽 n 概 露 か 念 に 公広 概念) に言 偽 0 から 無

批判機能」は存在しないのか、という問題を提起 ことは、ハイデガーの真理概念にこうした「検証 とになるのではないか、という危惧である。 請」が斥けられるという帰結を生むのではないか、 さらには「統制的理念や批判的基礎づけという要 な排斥によって、正当化や基準としての真理が 彼が危惧しているのは、合致としての真理の完全 こまで的を得ているのかはひとまず措くとしても、 して除外してゆくトゥーゲントハットの行論がど う定式をハイデガーの真理概念とは無縁のものと す つまり真理は、その検証機能・批判機能を失うこ この

うに解決されているのであろうか 以 £ 二点の問題は、ハイデガーにおい てどのよ

=

真理概念の拡張の意義

アポパンシスとへ

11 メーネイア

暴露概念の二 義性の

問

は、 らず、 ここでわれ という場合の狭義の暴露のことであった。しか 合の広義の暴露と、「偽なる言表は暴露的でない」 性とは、「あらゆる言表は暴露的である」とい でこれを「狭義 が想定する 「或るものをそれがある通りに」見させることであ それによって規定されているという事実である。 定されており、言表の「見させる」という働きは 釈学的な」 よって、彼のいう「広義の暴露」と「根源的暴露」 の暴露」と呼んでいるものによって、ハイデガー ると言い換えてよい。ただし、 るものを見させる」ことであり、 ある。彼の言う広義の暴露とは、言表において「或 ハイデガーにおいては、言表における暴露の 1 トゥーゲントハットが指摘する「暴露 ゥーゲントハットが指摘していた暴露 あくまで言表真理の内部に成立する二義性で 前言表的、 根源的暴露 「根源的暴露」をも含意させ、 われが想起しなければならな 0 暴露」と区別している。 前述定的な、さらにいえば (開示性) というもの 彼は自らが「 狭義の暴露とは の二義性」 11 その上 0 0) も想 みなな う場 広義 は 解 義

めぐる区別は次のように整理されねばならな ける「根源的 理における「広義の との X 彼がまず第 別 との 暴 間 露」との区別である。 に 一に見落 混 暴露」と現存在の振舞 乱 が生じているように とし てい るのは 暴露概念を 言表真 11 思 にお わ

# 《暴露 (もしくは真理) の階層

根 学的 (hermeneutisch)」次元 源的 暴露 (もしくは開示性) としての 解 釈

0

お 扱

②言表的 直接的 言表とは別様の挙示的暴露 [祈る] であるか 暴露としての「挙示的 暴 露 偽に相当するものを持たな [見る、聞く、触れる] であるか (apophantisch) 11

或るものを ..... 言表は暴露的である Xとして 見させる

述定的な真偽が成り立つ

元

せるか 或るも せるか 或 るも 0 のを \*\*\*・・・ 真なる言表は暴露的 ..... それである通りに それでない 偽なる言表は遮蔽的である ものとして である」 見さ

0

(狭義)

ている。

ば、 在者を歪曲し、塞ぎ立ているのであり、 い存在者として」見させるならば の意味で「真」である。 を存在者としてそれ やっ るも (Schein)」概念との連関と区別とにそっくり対応 しても、その仕方は二通りあるのであり、「存在 の仕方においてである。 狭義の真偽 うことができる。 る言表もたしかに いて「真なる言表」 るならば、 一別は、 |移行状態にある (広義の暴露概念)。「言表」に (Phänomen, 偽」となるのである。こうしたハイデガー て「或るものとして」見させるか、 その言表はたしかに存在者を暴露しておりそ のを見させる」という意味にお 表 真 『存在と時間』第七節Aで展開され 理 0 事態は次のようになる。「言表」 0) 区別が生じるのは、 V ヴェ φαινόμενον) ] 両者は がある通りに」見させる も「偽なる言表」も同列に ル、 暴露的」である。この点に だが、「存在者をそれ 或る存在者を見させるに す いずれも隠蔽 なわち②に焦点 或るものをどう 概念と「 その言表は 11 ては から露現 その意味 というそ た VI は を当て 仮 でな な か

概念 だが、 < 偽というものも「存在する」のだということを示 性を持っている。そし た連 は 0 何 取 したことを、プラトンの「不滅の功 論理」に基づくものである。ハイデガーは誤謬や 在者」の一種であると見なす「欠如 (στέρησις) の そこで働 つがゆえに「仮象」も可能となるのである。 のとしておのれを示す」。 て、「仮象」は「おの 存在者 (ŏv)」の欠如 点に 評価 れを示すもの」という意味では った®。ハイデガーにとって問題 てそれ 言 の二義性に ウ 表に 1 お 厳密な意味で で という真偽 あ 現象概念と暴 ゲント 11 いているのは、「非存在者 (μὴ ὄν)」をも おける「 で てトゥー る。「現象」 そこに新たな存在問 あ しろ、 る 通 ット 0 真」であ りに ゲ れ自身に即してそれ 0 「特殊的意味」ではな ノントハ て、 が見 態である限りにおいて「存 露 現象概念の二義性に 「現象」は 現象概念はこうした二 お 仮 このような二 0 真 落 り、 理) とし ツ れを示す」 1 何 題 「現象」であ てい 0 概念とのこう ŧ 「おのれ自身に から で の設定を見 指 績」とし あったのは る第二 偽 ずれ 摘はたし 義性 でなな のに 一である VI 暴露 を持 て高 対 0 11 ろ、 to 点 か L

> な VI

はずである。

『人間的自由の本質について』解釈 核心 能性」を追求しようとした点と無関係では を向かわ 条件を見出そうとする点に据えら られるか、 解することがあるのか、 求められるのか 「偽」となることがあるのか、その可能性は 7 りとすることでは は、 0 おそらく三十年代後半に 通 しめた遠因も、このテクストが そうした「特殊的 りである。 といった、 、さらにいえば なく、 偽や誤謬や誤解の か し、 そ 意 0 そも 可能性 入ってシェ 味」を確 11 1 そ デ なぜ へとハ れている t ガ は 現存 どこ な 定 1 リング 1 ぜ 可 L 0 どこに に 探 あ 悪 デ 0) 在 7 ガ 性 事 b 0 で 求 t 究 得 可 あ 8 0

た。 機能 を広 露的であ お る。 ける の欠落 ウー だが 義 B 0 ハイ ゲントハ 暴 暴露概念に 真理概念に るし 0 A に デ 概 兆 とは ガー 念 お 候を見て取 ットは 0 11 収斂 は て確 おけ 言うも 義 た 認し させ L 性 る批判的 り、 かに ハイデ 0 は たとお ていくこと 0 L それ 0 「いかなる言 彼にし ガー 機 か を危惧 りと り、 能 が てみ 言 真 失 確 L 批 理 0 保 表 「表も n さ 7 判 真 的 11

暴 7 に

は、「言・ ガー 「それ自身に即してそれがある通りに見させ する現存 デガー いことを強調するのである。 いう挙示機能へとたえず立ち戻らなければならな はくどいまでに言表はその第一義的意義とし できないことを知っているからこそ、ハイデガ 言表を真 にとっては「言表」に対する不信感の現れであり、 保し得るなどとは考えているはずがな としても、 を見て取 イデガー る存 あ う言 式が の真 表も暴露的 ることを 在 表 にとっても理念 そ 属し 在 がが に 者 理概念にお 、理の場所としてそれに安住することなど る が の振舞 でどれ あ を投影 方は適切であるとは それ 0 てい る。 広 訴 0 だけ である」ということはハイデガー によって言 義 えている あ る。 い 現 シ」の暴力 り、 もしくはそれによ 存 解 VI 在には 釈 軸 言表という行為におい それ て批判的 それ 表 学 は設 のであ 露 が 的 表こそがつね 概 をたえず わ を挙示させて 設定され したがって、 一遂行 不可 念ば n 機能 る。 い わ いがた 避 か n てお 的 が喪失され りを 危 ま を に 0 VI L 惧 欺 て開 次元 り、 い。 頹 に真 てや 強 する い 、るか」 11 調 る」と 口 てそ それ イデ 示さ ての か を確 する 必 能 る 1 な 1

> につ 機能 険性 は なる危険として現れ そ 0 n が 0 は いて語っているだと言うべきではな の喪失どころか、 を孕んでい 命題論的な<として>」へと平板化され 「隠蔽され 表され を滑 」、その る。 たも り落 る。 とし 暴露概念 0 結 t むしろそのたえざる危 「解釈学的 語り継 黒わ ついには の二 n が わ 義性は n n なへとしてV」 挙 を 7 欺 示 くに され い くことに だろう 批 る危 険性 判 たも つ 的

そ言

<

レス え直 表 の拡 なったか 以上のような考察を 0 1 つ - デガー がロゴスについて語るとき、 張 ていたのではなく、 即 すかとい 存在の了 て語 な は に伴って、 L と思 **^として∨」** た命 0 っていたのである。こうし アリスト う点に端を発し わ 真 題 解構造」へ、より正確に言えば n 理 論 真理もその「場所」を「 概念の る。 理学や言語学的 テレスのロゴス概念をど 実は 構 通 じて、 造 意 むしろ現存 ハイ 義 へと位相をずらすこと てい は デ 暴 あ それ る。 ガ 露 る 知 Î 在 程 概念とし 見に は決 たロゴ 0 アリス 度 0 了 明ら 真 解構 7 理 ース観 こう捉 い て言 トテ か 7 概

ては、稿をあらためて論じなければならない。こうした観点からの真理概念のアプローチについス解釈の検討へと足を踏み入れなければならない。ガーと「論理学」との関連、およびアリストテレになる。だが、この点を確認するためにはハイデ

## 凡例

SZ: M. Heidegger, Sein und Zeit, 16.Aufl., Tübingen: Max Niemeyer, 1986.

GA21: Martin Heidegger Gesamtausgabe Bd. 21, Logik. Die Frage nach der Wahrheit (Marburger Vorlesung Wintersemester 1925/26), Vittorio Klostermann, 1976.

### 注

- (1964), in: Otto Pöggeler (Hrsg.), Heidegger. Perspeketiven zur Deutung seines Werkes, Athenäum, 1984. Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger, Berlin, Walter de Gruyter, 1970.
- ( \approx ) Tugendhat, Heideggers Idee von Wahrheit, op.cit., S.287.
- (3)「言表真理」という耳慣れぬ表現は、ハイデ ある」というニュアンスが含意されている。 ある」というニュアンスが含意されている。 ある」というニュアンスが含意されている。 ある」というニュアンスが含意されている。 ある」というニュアンスが含意されている。 ある」というニュアンスが含意されている。 ある」というニュアンスが含意されている。
- (4)以上三つのテーゼは、いずれもSZ, S.218に見
- 第六研究での「明証と真理」の議論には触れ『論理学研究』の批判的序説たる第一巻に局理象学的真理理論に関する通常の叙述は、(5) SZ, S.218に付された脚注には、フッサールの

ば「直観されるとおりに思念されてい いう関係に、いいかえれば直観という認識作 る。フッサールの真理解釈は、 で、実は妥当としての真理概念はフッサー 理学の曖昧さを次々と突いていく。その上 が、同時にこの「命題真理」としての妥当論 の真理解釈の核心ではないことを明らかに しての真理概念が潜んでいることを指摘する ルの心理主義批判を扱い、その前提に妥当と ものとの区別を盾にこれを批判したフッサー 理学主義に対して、実在的なものと理念的な 訴求に巧みに利用されてい 関する「哲学的論理学」を遂行する必要性 あたりの事情を明らかにすることが、 られることがない、 論理学』講義(GA21)準備部では と明記され る。彼は、 形式的に てい る」 まず心 真理 11 ح え す ル

応

こに求められてい 「ラディカルな批判」としての「真理への われていない、といわれる。 のと見なされうるのかについてはまだ何ら問 なぜ「命題真理」や「直観真理」は自明なも とは「直観真理」が自明なものと見なされて スにおける真理問題」が問わ い」はこの地点から始められ、「アリストテレ きた経緯を明らかにはするものの、そもそも 位」の系譜に連なるものなのであり、このこ アリストテレスにまで遡る「直観真理の カルト、トマス、アウグスティヌス、そし 真理解釈は、実はカント、ライプニッツ、 ここでさらに切り崩しが行われる。そうした う。総じて第四四 テーゼがフッサールのも おく必要があるだろう。Vgl., GA21, S.31-126 義での議論との重複が見られる。)。 ントハットの指摘は当たっていることになろ たが る点にわれ 節には、随所に『論理学』講 つって のだというトゥー 「通りに」を含ん れる必然性もこ われは留意して ハイデ しか ガー 問

Ibid.,S.297

Tugendhat, op.cit., S.293

る「の通りに »So-Wic«」とはまさにこれに

ると定式化される(第四四節

a

に登場す

はある特定の「の通りに »So-Wie«」関係であ

(Identität) であるとされる。ここで、真理と

るもの」との自同性 (Selbigkeit)、同 用における「思念されるもの」と「直観され

 $(\infty)$  Vgl. GA21, 168f.

(ささき まもる 法政大学)